

受け継がれる文化

無病息災を願う

白石の神送りとは

白石地区の人たちによって、毎年5月上旬の日曜日に執り行われる行事です。神送りは「奈婦利神を送るぞ、かぜの神を送るぞ」と小旗に墨書きされているように、疫病神・かぜの神送りとして伝承されているもので、その年の農民の素朴な祈りである無病息災を願うものです。

それぞれの願いを小旗に書き、身についた病魔をカワラガシ※に託して、ヒノキの葉と青竹でつくった神輿とともに旧村境まで運び、下流へ送り出します。村境に、中央に穴の開いた大きな草鞋をフセギとして吊し、厄病等の再侵入を封じています。無病息災への願いを今に伝えるこの行事は、白石地区の住民等が世代を超えて参加し、受け継がれてきた伝統文化となつていきます。

※カワラガシ・・・豆を炒って半紙に包んだおひねり

白石の神送りの流れ

白石の神送りは、午後、地元の花火師が打ち上げる花火の音を合図に、八坂神社で祭典が始まり、その後、神送りの行列が村境（隣接する皆谷地区との堺）に向かって出発します。

行列は横笛、神官、神輿の順に並び、その後ろに旗を手にした人々が続きます。旧村境に到着すると、槻川の川原の大岩の上に神輿を安置し、川をまたぐように張った縄に大草鞋を下げ、祭りは終了します。

文化財としての価値

白石の神送りは、古くから農村に受け継がれてきた「疫病神送り」の姿を、今も大切に伝えていく行事です。小旗を立て、病や災厄を託した神輿を村境まで運び、川へ送り流す――。

その一つひとつの所作には、自然と向き合いながら暮らしてきた人々の願いや祈りが込められています。さらに、災厄の再侵入を防ぐという風習には、昔からの境界信仰も色濃く残されており、日本の民間信仰や村落文化を知るうえでも貴重な行事となっています。

また、神送りが白石地区を巡りながら旧村境へ向かう姿には、山あいの集落なら



1



2



3

1 旧村境を目指し、神送りが出発
2 八坂神社へのお参り
3 厄病等の再侵入を防ぐ

東秩父村には、受け継がれてきた伝統文化や歴史的価値を有する文化財が数多く残されています。国指定重要文化財には、細川紙の製作技術と、手漉和紙の製作用具や製品があります。なかでも、細川紙の製作技術は、2014年にユネスコ無形文化遺産へ登録され、その伝統と価値が世界的にも高く評価されています。その他、県指定文化財13点、村指定文化財56点があります。

数ある文化財の中でも、本特集では、白石地区で長きにわたり受け継がれてきた伝統文化「白石の神送り」に焦点を当て、その歴史や魅力について紹介します。